

ピカソのメイク
藤岡純一

（自身の経験した少し風変わりな出来事と同種の出来事を百年前の記録に見つけた。今様の言葉でいって、エモさが半端ない。しかし、その興奮を人様に伝えるには、その周辺事情や関連人物など、かなりの量となる情報を共有していることを前提として、そのうえで、共有されていない情報をテキスト化しなければならない、自己満足にならず、冗長になることなく。）

二〇二三年春、島崎藤村「夜明け前」（ちくま日本文学全集・文庫版）を二か月かけて読み、初秋、馬籠の藤村記念館を訪ねた。

人物紹介ビデオでは、フランス滞在時、家族と別れて鬱屈した日を過ごしたと、ナレーションを聞く。展示物の中にバレエ「バラの精」のプロマイド（タマラ・カルサヴィナ）があり、「バレエ・リュス」の時代に遭遇していたのがわかった。ならば、なにかバレエに関するテキストを残しているはず。

藤村全集のタイトルを探ると全三一巻中パリにかかわる題名の作品がいくつか含まれている一巻がある。翌週、全集を所蔵している大阪市立中央図書館に伺った。

「戦争と巴里」の一節に、ニジンスキー（ニゼンスキ）の記述を見つけた。

「自分の心は今、頻に音楽を渴き求めて居る、文学の中にも、絵画の中にも、音楽そのものの中にも。……ここへ来て自分は努めて種々な新藝術に接しようとした。心の渴きを癒さうとした。ドビュッシーの新曲を聴いた時。……マラルメの詩が歌はれるのを聴いた時。バクストの強烈な色彩を背景としたニゼンスキの舞踏を見た時。……セザンヌ晩年の画風の変化を受けて更に新たな道を歩まうとして居るマチス其他新進画家の製作の前に立つた時。……近頃、ふとある雑誌を開けて見て居るうちに、自分の想像するやうなシンフォニーがマイヨオルやブルデルの彫刻の中にも流れて居ることを知った。」（藤村全集六巻四〇七頁、筑摩書房）

藤村はニジンスキーの舞踏を見ていた。異国の地で、心身のバランスを崩していた日々、その感情を癒しただろうパリの新芸術の熱気が百年を超えて伝わる。

○

「バレエ・リュス」は、フランス語で「ロシアのバレエ」の意。「白鳥の湖」をはじめバレエの舞台作品が完成をみたロシアの地で活躍していたバレエダンサーが革命前夜の窮境にあったとき、興業師ディアギレフが束ねて、パリで旗揚げされたバレエ団の呼称で、ニジンスキーを中心にセンセーショナルな作品をヒットさせ、バレエの歴史のエポックを刻んでいる。往時パリに集う音楽家・美術家・衣装制作など一流の才能を巻き込んで、「総合芸術」の華を開かせる。

「バラの精」は窓辺でまどろむ女性の夢のなかに花を全身にまとう男性の妖精が舞い降りる。「牧神の午後」は、ニジンスキーが半牛の着ぐるみ姿で、不自然なエロティズムを踊る。

これらは、ロシアバレエにあるドラマ性に乏しい短編群だが、すこし系統の違うものに「三角帽子」がある。スペインの小説に筋立てを求める小品である。粉屋・粉屋の妻・代官・警官がからむコメディで、「三角帽子」は、頭上からみると三角形の帽子で、それぞれの角にボンボリが吊られている。高貴な人がつけることを許され、ここでは代官が着用する。

○
私は、二〇〇九年秋に大阪の名門バレエ団が運営するバレエ学校の門をくぐった。年端のいった中年おとこには高い敷居を跨ぐものだが、大人むけクラスを見学した感じでは、スポーツジムでの一〇年近いダンス経験の身で馴染めそうに思え、実際、大丈夫だった。「三角帽子」は翌年の定期発表会の演目とされた。スポーツジムでは経験できないドラマ作品に参加できることにひとしきり興奮を覚えるものだった。

緞帳が上がると、粉屋と粉屋の女房が立っている。登場人物と演目の筋立てを観客に紹介するナレーションが流れる。

「スペインの小さな村に、粉屋の夫婦が住んでいた。粉屋の妻は、美人で村一番の人気者。粉屋は、そんな妻が少々心配ながらも、自慢」

代官が登場して夫婦の間に分け入る。

「そこへ代官が寄ってきて、粉屋の妻に一目惚れ。代官はなんとか粉屋の妻を自分のものにしてと言ひ寄るが、軽くあしらわれ、村の笑い者に。怒った代官は、警官に命じ、粉屋を逮捕させる」

警官役の私が代官の横に進み出て、粉屋を拘束する。

「悲しむ妻に再び言ひ寄る代官を、妻は橋に導き、川に突き落とす。びしょ濡れになった代官は、粉屋の家に。一方、警官から逃げ出してきた粉屋は、家の前に干してある三角帽子を見てびっくり。追いかけてきた警官は、三角帽子をかぶった粉屋を代官と勘違い。それをいいことに、粉屋は、早くあいつを捕まえろ、と警官に命じた」

プロローグが終わる。

○
スポーツジムが主催するダンス発表会で舞台に立ったおかげで、ご指導をえて、ドーランをはじめ、サラリーマンには縁のおいメイク用品を所持することができた。素顔では舞台に立てない。照明に負けて、幽霊のように見えてしまうそう。バレエの場合は、男性もアイラインを大きく引くし、役柄によっては、サーカスのピエロも顔負けの大胆な色使いもある。メイクは本番当日の最初の準備である。ホール控室には、壁に沿わせてカウンター状のテーブルと鏡が設置してあり、男性出演者も並んで、鏡に映る自身の顔と対峙する。ドーラン・パウダー・アイシャドー・アイライン・鼻たて。

メイクパレットは百均ショップで入手した。いくつか買っていたが、警官の役では、赤系統の五色（ピンク系から赤色を中心に一番濃いものは茶色）のものを使った。茶色を指で鼻の側面に塗り伸ばし、シャドウを入れる。

警官は早とちりの、ちよつとおバカさんな役まわりなので、マイムではいろいろと演出を

入っていただいている。大村崑だったり藤山寛美だったり、ちょっとおバカさんの喜劇人は、頬に日の丸のような紅を差していた。そういう先人を真似ればいいのだ。メイクパレットの赤色のチークが出番を欲している。

しかし、あんまり極端な日の丸は、ためらわれた。迷い迷い赤色のチークをドーランの上に乗せていく。にじみだすぐらいにうっすらと、でも、遠くから見られて、わかってもらえない程度に。まあ、こんなものか、鏡の中の警官氏に納得させる。メイクが終われば、衣装を装着し、さあ出番だ。

舞台裏通路で待機していたところ、センセイ（私よりずっと後に生まれている。念のために記しておくが、女性である。現役バレエ団員さんである。）に直面した。センセイは、一瞥、私のたくらみを見抜かれた。少し首をかしげ、冷静な観察をして、パレットをもってくるように指示された。楽屋へ走り戻って、パレットと筆を差し出す。センセイは、肘をたたくので、筆を私の頬に這わせる。人と人との距離として、明らかに近すぎる。こんな距離で異性と対面しては、呼吸も不自由する。視線を外すわけにはいかないが、見つめるのもためらわれたら、センセイのイヤリングが視線を吸収してくれた。センセイは、さらに赤を塗り込んで、日の丸にされた。

通路の壁の全身が映り込む鏡の中で、両頬の日の丸が私を笑う。私も警官氏に微笑みを送る。「じゃあ、楽しんでね」と声をかけられて、センセイは、観客になるのだろう、客席方向に消えた。

——プロローグが終わる、中幕が上がり、後ろに控えていた村人たちの群舞が始まり、粉屋の夫婦も混じる——

・警官、代官を先導して登場

・代官が粉屋の女房に言い寄るあいだ、警官、舞台袖近くまで離れ、我関せずと飲酒にふけり、昼寝

・警官、代官と呼ばれ、粉屋をお縄。粉屋を連れて、舞台袖に捌ける

・脱走した粉屋を追って、警官、舞台に走り込み、粉屋を探す

・三角帽子をかぶった粉屋を代官と見間違う

・にせ代官の指示に従い、警官、家に入り、代官を粉屋と間違えて逮捕する

・代官をしょっ引いて、捌ける

——村人と粉屋夫婦の喜びの群舞が続くなか、幕が降りる——

○

閲覧室の座席で藤村全集からバレエの記述を探しだし、馬籠紀行を留めるための来館目的を達して、一息ついたとき、すぐ横の開架書棚に並んだ三冊が白字の題字「ピカソ」を発色させていた。背表紙に青・緑・赤のトリコロールの一色ずつを充てられた大型の書籍だった。（ジョン・リチャードソン、白水社二〇一五年出版）

ピカソは、「三角帽子」の舞台背景絵を描いている。新国立美術館「バレエ・リュス展」（二〇一四年）で見た。これだけのボリュームがあれば、「三角帽子」にかかわる記述があ

るのではないか？ 書物の旅は続く。

一卷め。二巻め。見当たらない。赤の背表紙の三巻めを開くと、目次タイトルの一つに「ロンドンと三角帽子」があった。

ピカソは、バレエ・リュスの主導者ディアギレフに依頼されて、「三角帽子」の舞台美術を引き受けている。「三角帽子」の初演は、一九一九年七月二二日、ロンドンのアラハンブラ劇場。

英国人バレエ評論家（ポーモント）がこの舞台裏を描写している一文を引用していた。

（「ピカソ」三巻一六三頁）

——『三角帽子』初演の晩、ポーモントが舞台装置の準備が進むのを眺めていると、ピカソがドーランの盆を手にした裏方を連れて、ゆっくり姿を現わした。

スペインの警官の制服を着たダンサーのひとりだけが舞台上になるとピカソに近づいて会釈し、そのままの姿勢で待つ。ピカソはドーランをいくつか選ぶと、ダンサーの頬に青、緑、黄色の大きな斑点をつけた。そうなるとダンサーはいかにも警官らしく不吉な形相になる。ひとりが立ち去ろうとすると、次の警官がやってきたが、踊り手仲間の姿を見たこの男の仰天した表情が今でも目に浮かぶ。

……ピカソは「三角帽子」に出演するタンサーたちの顔をカンヴァス代わりと心得た。化粧の下絵では、ピカソは部族風の模様やそのころ油彩画に用いた点描法も試している。メイキヤップの方法を細かく指示した図をダンサーひとりひとりに手渡したドラムとは異なり、ピカソは自分で手を動かすのを好んだ。——